
光と影

冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と影

【Nコード】

N2782B

【作者名】

冷

【あらすじ】

ノンフィクションのお話。レイプ。性同一性障害。鬱。

ゆうすけ

「先生、今日体調悪いから保健室行きたい」

と朝から憂鬱な顔をしながら担任と話すマイ。

保健室へ行ったマイは

「先生おはようございます。今日も体調悪い」

と保健室の先生に話す。保健室の先生は優しい笑顔で

「朝御飯また食べてないの？」

とマイに笑いかける。

保健室登校。マイの毎日はそこから始まった。最初は毎日普通に教室に行き友人も多かった。毎日笑顔絶やさなかったマイだったけれど日に日に友達なんて結局ウワベだけだと思うようになっていった。

「ただいま」

何事もなかったかのようにマイは笑顔で玄関のドアを開け玄関に置いてある水槽に目をやる。

そこにはマイが大事に育てているカメが2匹。

そのカメ達にもマイは笑って

「ただいま」

といい靴を脱ぎ携帯の元へ。

そして携帯でメール。

その相手は出会い系で知り合ったゆうすけだった。

「ただいま。」

ゆうすけは何してる？」

とメル友のゆうすけにメールを送る。

すぐその返事が返ってきた！

マイはニコニコしながらメールを開く。

そこには、

「お帰り。今からバイトだよ☆」

と書いてあった。

マイは少し表情を曇らせながら

「そうなんだ。頑張ってたね☆」

とメールに夢中になった。

心の中で誰かにすがりたくて仕方がなかった。

そして中2の待ちに待った夏休み！

宿題は多いけど学校嫌いのマイには待ち望んでいた休みだった。

校長先生や担任の長い話をダラダラ聞いていて走って保健室の先生の元へ。

「やっと夏休みだ！もう学校嫌いだからちょー嬉しい☆」

とマイは笑顔で言う保健室の先生はマイを見て、

「あんまり無理しないでその笑顔でいてね」

といつも優しく暖かい言葉をかけてくれる。

そんな保健室の先生の事がマイは大好きだった！

マイは帰り道に友達といろんな話をしながら帰った。

その話の内容はHの事だった。

中2でまだ未経験のマイは周りが経験したと聞くたびに自分だけ取り残されたような気持ちになり日に日に焦りを感じるようになりました。

その日の夜メル友だったゆうすけから告白を受け焦りもあったマイは本当に好きか分からないままゆうすけと付き合う事に。初彼氏ができたと言うのに何故か笑顔が消えたまま、マイの心には彼氏よりも初体験の事しかなかったのだ。

ゆうすけと初デートの日！

ゆうすけは今池に住んでいて一人で行くのは怖くて友達のエリコと行く事にした。

行きの電車の中ではエリコとマイは今日会うゆうすけの事を話していた。

そんな時でもマイの中では処女を早くなくしたいと言う思いでいっぱいになっていた。エリコはまだ未経験でこの事を話してもゆっくりでいいんだよ！

とマイに言ってもマイは

「早く終わらせなきゃ置いていかれる」

と焦りの様子。

エリコは少し不安げにマイを見つめ

「やっぱりやめよ、Hは好きな人とすればいいんだよ。ねえーマイ」とマイを説得しようと必死なエリコだがマイは

「だって…」

と言葉を濁し下をうつ向いたまま黙ってしまった。

そんなマイにエリコはもう一度

「ねえーメールだけなんでしょ？顔も知らない相手でもいいの？ねえー」

とエリコはうつ向くマイの顔を除き込み真剣な顔で言った。

マイの中では初Hをする相手なんかはどうでも良かった。

ただ周りにこれ以上置いてかれるのが嫌だった。

この時のマイは周りに嫌われないか必死で後からとても辛いことが待っているとは思ってもみなかった。

たっくん

いつまでたってもゆうすけからはメール来なかった。

ゆうすけとHしてから何か変わった分けでもない。でも少し安心。

「これで、みんなと一緒に」

って思うのと

「これで、良かったのかな？」

って思うのとで頭ぐちゃぐちゃ。

ゆうすけの裏切りへの怒りは日に日に強くなり

「復讐」

を思い付いた。

何人ものメル友と付き合いその気にさせては振る。と言うのを繰り返した。男は全部憎かった。なのに、たっくんに出会った。たっくんは18才の高校生で顔はめっちゃイケメン。

少しラルクのHYDEに似ていた。

そして初めて会って付き合う事になりたっくんとのキスは公園で。

ゆうすけとしたキスとは違い心が暖かくなりずつとしていたと思うようになった。

これが恋なんだって思いたっくんにとんどんハマっていった。

毎日メールして毎日電話して。

毎日たっくんに繋がりがたくて電話代なんか気にしてなかったら：

「6万」

お母さんはぶちギレ：そして携帯は解約。

たっくんに繋がれない、こんなブサイクなアタシじゃ釣り合っていない：、怖い、どうしていいか分からない。

っと毎日泣きじゃくっていた。そしてマイは倒れて救急車で病院へ。今回倒れたのは不安から来てるみたいだ。

おばあちゃんと薬を貰い帰り道には何も話さず長い沈黙だった。

お母さんが仕事から帰って来てマイが余りに落ち込んでいたからか

プリペイドの携帯を買ってきてくれた！

「やったー！！お母さんありがとう！」

とお母さんにお礼を言うとお母さんは困った顔で

「使いすぎないように」

と言った。

すぐにマイはたっくんに電話した！

「もしもし、たっくん？ やっと携帯もてた！ やったー！」

と電話口でハシャグマイにたっくんは

「おかえり、待ってたよ☆」と迎え入れてくれた！

そしてまた毎日話すようになった！

デートしてキスしてもらってとうとうたっくんと初めてのH！

なんかドキドキ。

たっくんにゆうすけの事知られたくなくて、

「アタシたっくんが初めてだから」

と言っちゃった。

そしてたっくんを見たらすごい嬉しそうに笑い抱き締めて、

「大切にやるから」

って言ってくれた！

ゆうすけとした最悪のHとは違ったっくんとしたHはかなり痛くて血がでた。

自分でもかなり不思議で、友達と二人で、

「入れてなかったか小さかったのかな？」

って笑って話しをしていた。

この日からゆうすけの事は忘れてマイのの初めてはたっくんだったって都合の良いように思いこもうとしていた。

そんな幸せは長く続かず、バチが当たったんだ…

「レイプ」

ニュースでしか聞いたことない言葉が頭をよぎった。

そうマイはレイプされた…

たっくんには言えない。でも言わなきゃ行けない。

「もしもし…たっくん？」

と泣きたい気持ちを抑え電話をかけるマイ。

たっくんはラルクのライブを見に行った帰りでテンション高く電話にでた。

「あつ、もしもし、マイ？ライブめっちゃ良かったよ！マイは何してた？」

と大好きなたっくんの声に安心したのか不安になったのかマイは泣きじゃくった。

たっくんは、心配になり

「おい、マイ？どうしたん？」それでも返事をしないまいにたっくんは声をあらげてもう一度名前を呼ぶ。

「おいっ！マイ何があった？」

マイは我に返ったようにゆっくりゆっくり話し始めた！

「あのね、今日良く覚えてないんだけど…」

と言いにくそうに言うマイに焦れなくなったたっくんは、声をあらげ

「だからな、どうしたんだよ！」

と言われマイは、涙をじっとこらえて

「レイプされた…」

とたっくんに伝えた。伝え終わるとマイは泣き叫びながら

「ごめんなさい、ごめんなさい…」

と謝り続けた。

たっくんは今の状況が飲み込めず黙り込んでしまった。

そして、一息してたっくんはキレた。

「誰にされたんや？そいつブチ殺してやる！おいっ、何処でされた！誰にだよ…」

つと声をあらげていたたっくんはしだいに黙り込み声を殺して泣いていた。

そんなたっくんに嫌われたくなくてずっとマイは謝る。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

と。

そしてマイは自分の腕を切り刻んでいた。

そう、リストカットだ……。マイは初めてリストカットをした！

たっくんにはバレないように声を殺して……

長い沈黙を破ったのはたっくんだった！

「マイ、明日会おう？」

と心配そうにマイに言う、マイは泣きながら

「ありがとう、でもマイはもう汚いから……」

と電話を切り電話に向かって

「たっくん、ごめんなさい。大好きだよ」

と言いつづけました！

携帯がずっと鳴り続けていた。

マイはもう聞こえているのか分からなかった。マイの目からは大粒の涙が……マイの手首からは大量の血が溢れていた。

そしていつの間にか朝になって……たっくんに会う気にはなれず、友達のゆうとめぐを誘ってカラオケに行った。

いつも以上に明るいマイを見て二人は心配になりゆうが声をかけた。

「マイ、なんかあったん？大丈夫？」

と言ってもマイは上の空。マイの大好きなカラオケに来てるのに、いつもと違うマイにめぐが、

「たっくんとなんかあった？」

と言ったその時には自然とマイの目からは涙。

ゆうとめぐが何も言わずにマイを見つめていた。

その時に、マイは重い口を開いた。

レイプされた事、たっくんに会おうって言われた事、泣きながらもゆっくりゆっくり話した。その時に、カラオケの部屋のドアを叩く音が、トントン。

ゆうが開けてみるとそこにはたっくんの姿が。

ドアを開けると同時にたっくんの怒鳴り声が、

「お前なんで、電話でないんだよ。どれだけ俺が……」

と最後まで言う前にマイの腕を掴み抱き締めた。

マイの心はまた暖かくなり子供のようになつてたつくんに掴まり泣きじゃくった。

「ごめんなさい。ごめんなさい。マイの体は汚い…もうたつくんに愛される資格なんかない…」

と最後まで言い終わる前にたつくんはマイの頬を叩いた。

「痛い…っ」

とマイは小声で言いながらたつくんを見つめた。

マイの頬をそつと撫でながら、愛しそうな目でマイを見つめ話し始めた！

「マイのどこが汚い？なあゝ！まぢそいつ殺してやりたい！くそっ…」

とカラオケの部屋の壁を殴り続けるたつくん。

ゆうとめぐはそんな二人を見守り外に出る事にした。

静かになった部屋では誰も歌わなくなった歌が流れていた。

どれくらい時間たっただろうか、泣き止んだマイをまた力強く抱き締めた。

「ずっと愛してるから。だからこんな事するな！」

とマイの傷だらけの腕を見て言った。マイはまた泣き始めて

「ごめんなさい。ごめんなさい…」

と謝るばかり。

そしてたつくんはゆうとめぐとマイを家に送り届け、バイト先に向かった。バイト先でイライラを隠せないたつくん。

マイの前では見せなかったがマイがレイプされた事に対してかなり怒りを隠せないたつくん。

「なんでだ…なんで？マイなんだ…ちくしょー…俺はどうしたら良いんだ…」

と自分を責めるたつくん。

たつくんに送ってもらったマイは血が滲む手首を見つめて泣いていた。死にたくて死にたくてたつくんともうしないと約束したリスト

カットをまたしてしまっていた。

何度も何度も繰り返し自分の体を傷つけるマイ。

数日が過ぎてマイはたっくんとお泊まりする日が来た。

ビデオ見たりたわいもない話をしたり。

楽しい時間は早く過ぎるばかりだった。

たっくんとマイは見つめあい唇を重ね、そしてマイの胸元に手をやろうとした。その時、

「嫌……っ」

と叫び声をあげガタガタ震えだすマイ。

レイプされた時のフラッシュバックだった。たっくんは何も言わず抱き締めようとしたが、マイはたっくんも受け入れなかった…

「さわらないで…」

傷ついた顔でたっくんを見つめるマイ。

それでもたっくんはマイを落ち着かせようと側にずっといた。

だいぶ落ち着きを取り戻したマイにたっくんは、

「今日、やっぱり帰るな！」

とマイの頭を撫でながら笑顔を見せた。

マイはたっくんの手を握りしめ

「帰らないで」

と小さく呟いた…。

そしてたっくんに抱きつきながら

「抱いて…」

と目に涙をためながらマイは呟く。

たっくんはそんな痛々しいマイを見つめて、

「今日は、やめよう」

と答えた。それは、たっくんの優しさだった。それなのに、不安定なままのマイはパニックになり自分がレイプされたからだと泣き叫んだ。

そんな姿を見たたっくんはマイの唇に唇をそっと重ねながらゆっくりと交わっていった。二人は泣きながらした。二人にとってすごい

つらいHでもあり幸せのHでも合っただろう。その日から数日が立ちたつくんから一通のメールが：

「少しの間一人にさせて」

とマイは泣きながらメールを返した。

「やっぱり、体が汚いから…？」

そのメールを送りすぐにたつくんからの電話。

「はい。もしもし。」

とマイは言う。

「変なメールするな！わかったな！」

とたつくんは怒鳴り散らした。

ゆっくり話を聞くと車校に行くためだった。けれども、マイの心はもう一人は耐えられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2782b/>

光と影

2010年10月30日05時55分発行